

15年ほど前、まだ朝早い時間に妻が寝ぼけて「コーン、コーン……」と言っていた。どうせ返事はできないだろうと思ったが、とりあえず「コーン、つてなんだ？」と聞いてみたら、妻は「トウモロコシよ」と答えた。朝起きてからその事を覚えていくか聞いてみたが、そんなことは記憶にないと言われた。もしかしてその5年後に会うことになる、本誌の**昆編集長との出会いを啓示**していたのであろうか。それにしても寝ぼけながら会話をしたことになるのだから、人間の隠された能力には驚くことが多い。

雑草対策の 飼料米のほずが……

と云う訳で、今年はコーンを播いた。最近はやりの穀物として収穫する子実コーンである。なぜ今年はコーンをやることになったのか、その過程には人間模様を投射する悲喜こもごもな出来事、そしていろいろな思惑が駆け巡ることになった。

農地の賃貸契約結んでいる11haの圃場は水はけが悪く、暗渠を施工するには最低でも400万円は必要で、アカザという雑草にも悩んでいた。ある程度水はけが悪くても雑草は一度水攻めにして、つまり水田に戻せば根こそぎ退治できるだろ

うと考えていた。

当然だが、水田には水が必要である。都合がよく、圃場のすぐ隣には本線の水路があり、樋門（水門）の手直しをして、水を圃場に引く張ることは容易だ。そこで水路を管理する地元の土地改良区（正式名称・水士里ネット）の地区担当者、若きホープの北島さんと、樋門の改修場所や工事の時期などを5月の通水時期までに話を詰めることになった。

さすがに年間600万円の負担金を土地改良区に支払うことになるのだから、しっかりと対応しないならイジメやろうかと思っただが、残念ながら真摯に対応してくれた。

いろいろな勉強会にも参加した。本誌連載「入るを計り出を制す！」を執筆している元北海道農政部・普及員で現在は長沼の隣町・栗山町で営農されている齋藤義崇さんからも直播水稻の実証例を学ぶことになった。**飼料米をつくって105万円／ha、11haの売上で1155万円、300万円の利益は軽くゲットだぜ！**



「コーンってなんだ？」
「トウモロコシよ」



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

**オレにも
言わせる!**

**北海道長沼発
ヒール宮井の憎まれ口通信**

メは食べるもので、作るものではない」と大ボラをカマシテいたので、いざやることになる周囲から**総スカンを食らう**ことになった。

実働は従業員に任せ、利益だけいだけだこうと考えたのが浅はかだったのか。結果として、泥の中を這いつくばるアジア農業文化の象徴である水田作業は、金髪・ブルーアイ志向が強い私には無謀な挑戦であり、能力を超える至難の業であると再認識した。したがって、挑戦を超えたデ

イファイアンス(反抗の意味)の分野を模索することになったのだ。冬の間に通い詰めている地元長沼町にある定期券を購入したら1回250円で利用できるジム「リフレ」で、A・1グランプリ2012で最優秀賞をとった柳原孝二さんに会い、コーン栽培の魅力を拝聴し、後先考えず栽培を決断することになった。

GMコーンの意図しない栽培

ふと考えてみたら、コーン栽培は初めてではなかったことを思いだした。2005年の秋に**緑肥**としてコーンを栽培したのだ。

長沼では町役場、JA(生産者)などの組織の集まりである協議会の判断で交付金の再配分を決めてい

る。麦後にエンバクなどの作物を播種、栽培、すき込みをすると当時8万円/ha(現在は5万円/ha)の交付金が生産者に支払われるありがた制度がある。当時、近所の白川敏文さんが麦後にコーンを栽培するとしっかりした根が伸びて、水はけが良くなると言っていたので、私も興味を持つことになった。

問題は交付金支払いの条件である、すき込み作業まで行なわなければならぬことだった。100%すき込み作業をしなくても大目に見てくれたこともあり、麦後にコーンを播種して、根の張りだけを残すために時を見計らって除草剤散布だけで済ませようと考えた。播種して6週間後の9月下旬に、**ほぼすべての植物を退治できてLD50の値が塩よりも安全性の高い、除草剤ラウンドアップ**を最大使用量である5l/ha散布して、コーンが枯れるのを待った。

ラウンドアップが少し余ったので情報提供者である白川さんの麦後コーン2haにも同じく散布した。これでコーンを含む雑草も一網打尽のアドイオス状態になる、はずだった……。1週間を過ぎたころからラウンドアップの効果が始まったが、**なぜかコーン数本が枯れない**のだ。同じようなことが白川さんの圃場でも発生した。良識・常識人である私はGM

条例(遺伝子組み換え条例)に従い、北海道・農政部に連絡をした。誰かがメディアにも連絡をしたので数社が取材に来て、その後、新聞やTVで情報が流された。ノンビリ構えていた農政部も慌てふためいたのか、現物を確認したいということになり、長沼にある道立中央農業試験場(当時の呼称)で調べてもらうと、アワノメイガに抵抗性のある遺伝子とラウンドアップに耐性のある遺伝子、そしてその両方の特性を持つスタックスの遺伝子が見つかった。

さー大変だ。意図ではないにせよ、05年当時、すでにGM作物がこの北の大地で存在していたことになる。結論としては種子の純度を決める法律は存在しないので(当時は、たぶん今も)どうしても種子の混入事故は発生すると考えたほうが普通である。道庁・農政部はやり取りのなかで「**意図しない栽培は条例違反ではありません**」と発言した。ぶったまげた! では何か、誰かが意図的にGM種子をこっそり他の生産者も種子に入れても、栽培者がその事実を知らなければ何の問題もない?

この北海道のGM条例の第1条には、「道民の健康を保護」とある。つまりGM作物が嫌いな道民もいるからそれに配慮するということなのだろう。この条例は元より安全性の

話ではないが、GMの安全性を気にする神経質な道民も存在する。

では、数学的にどのくらい配慮できるのか、その問いに答えられる道民はいるのだろうか。GMが1%の混入なら安全なのか? 表示義務のある5%以下は? 認可されたGM作物の安全性は内閣府の食品安全委員会が既存の作物と同じと明言しているのだから、余計なことを考えて前頭葉に無駄な負荷を与えることはない。

バイオ関係者の話では、形質が食用の非GMスイートコーンに見えてもGMの遺伝子が入っているものも存在すると考えることができるらしい。みんなおかしいぞ、自分の国で1600万tのGMコーンやGM混じりの種子を販売していながらGM反対!はおかしいと感じないのだろうか。そのようなことを道民、生産者、消費者、そして自分の子供たちとその背中を見せる親たちの姿勢はご先祖さんに恥ずかしいと感じないのだろうか? まっ、感じないんだらうな、金髪・ブルーアイ好きの不感症を治すGMが必要だらう。当時のコーン栽培の種子は国内業者から購入したが、すき込みを行なわなかった面積は交付金の対象外となった。あのときの仕打ちはいっぺり覚えていきますから、協議会さま♡